

招待席

中原 中也

なかはら ちゅうや 詩人 1907 - 1937 山口県に生まれる。大正十二年(1923)京都の立命館中学時代に高橋新吉の詩作を始め、この頃富永太郎、小林秀雄を知りまたボードレー、ランポーに傾倒。昭和九年(1934)第一詩集『山羊の歌』を刊行、「四季」「歷程」の同人になるが、昭和十二年(1937)結核性脳膜炎で死去。翌年小林秀雄に託していた詩集『在りし日の歌』が刊行された。第一詩集所載の掲載作は、愛する人を友に奪われた口惜しさのままに歌われた。

盲目の秋

I

風が立ち、浪が騒ぎ、
無限の前に腕を振る。

その間(かん)、小さな紅(くれなゐ)の花が見えはするが、
それもやがては潰れてしまふ。

風が立ち、浪が騒ぎ、
無限のまへに腕を振る。

もう永遠に帰らないことを思つて
酷白(こくはく)な嘆息するのも幾たびであらう……

私の青春はもはや堅い血管となり、
その中を曼珠沙華(ひがんばん)と夕陽とがゆきすぎる。

それはしづかで、きらびやかで、なみなみと湛(たた)へ、
去りゆく女が最後にくれる笑(ゑま)ひのやうに、

巖(おごそ)かで、ゆたかで、それでめて侘(わび)しく
異様で、温かで、きらめいて胸に残る……

あゝ、胸に残る……

風が立ち、浪が騒ぎ、
無限のまへに腕を振る。

II

これがどうなろうと、あれがどうなろうと、
そんなことはどうでもいいのだ。

これがどういふことであらうと、それがどういふことであらうと、
そんなことはなほさらどうだつていいのだ。

人には自恃(じじ)があればよい！
その余はすべてなるまゝだ……

自恃だ、自恃だ、自恃だ、自恃だ、
ただそれだけが人の行ひを罪としない。

平気で、陽気で、藁束(わらたば)のやうにしむみりと、
朝霧を煮釜に填(つ)めて、跳起きられればよい！

III

私の聖母(サンタ・マリヤ)！
とにかく私は血を吐いた！……
おまへが情けをうけてくれないので、
とにかく私はまゐつてしまつた……

それといふのも私が素直でなかつたからでもあるが、
それといふのも私に意気地がなかつたからでもあるが、

私がおまへを愛することがごく自然だつたので、
おまへもわたしを愛してみたのだが.....

おゝ！ 私の聖母(サンタ・マリヤ)！
いまさらどうしようもないことではあるが、
せめてこれだけ知るがいい

ごく自然に、だが自然に愛せるといふことは、
そんなにたびたびあることでなく、
そしてこのことを知ることが、さう誰にでも許されてはゐないのだ。

IV

せめて死の時には、
あの女が私の上に胸を披(ひら)いてくれるでせうか。
その時は白糖(おしろい)をつけてゐてはいや、
その時は白糖(おしろい)をつけてみてはいや。

ただ静かにその胸を破いて、
私の眼に輻射してゐて下さい。
何にも考へてくれてはいや、
たとへ私のために考へてくれるのでいいや。

ただはらかににはらかに涙を含み、
あたたかく息づいてゐて下さい。
もしも涙がながれてきたら、

いきなり私の上につつ俯して、
それで私を殺してしまつてもいい。
すれば私は心地よく、うねうねの暝土(よみぢ)の径を昇りゆく。